三階

戸田鳥

【登場人物】

兄

弟

郵便ポスト

劇場係員

パントマイムの男

少女

客1・白衣1

客2・白衣2

客3・白衣3

客4・白衣4

第一場

ハッピーバースデーのオルゴール調のメロディーが流れている。

舞台の上手側奥に段があり、スロープで上り下りできるようになっている。スロープの上が兄の部屋。勉強机と椅子。少年が机に突っ伏して眠っている。曲が終わると、パジャマ姿の弟が登場する。

弟　お兄ちゃん。

兄　むにゃむにゃ。

弟　お兄ちゃん起きてよ。

兄　うーん。なに……

弟　玄関が開かないんだ。

兄　あ？　あー。うたた寝しちゃってた。なんだよ。

弟　玄関のドアが開かないの。

兄　開かない？　どうして。

弟　雪で。

兄　は？

弟　雪だよ。いっぱい降ってるよ。

兄　まさか。

弟　ほんとだよ。

兄、窓を開ける。

兄　うわ。すげえ積もってる。

弟　雪で重たくてドアが開かないの。

兄　嘘だろ、もう5月だぞ。

弟、くしゃみをする。兄、窓を閉める。

兄　そんな格好でいたらまた風邪ひくぞ。布団に戻れよ。

弟　お兄ちゃん、ポストを見てきてよ。

兄　ポスト？

弟　手紙が来てるかどうか。

兄　こんな時間に郵便は来ないよ。

弟　今日、ポストに手紙入ってるか見てくるの忘れたんだもん。一昨日も昨日も来なかったから、きっと今日は届いてるはずなんだ。

兄　手紙は逃げないって。

弟　手紙が雪に埋まっちゃったらどうするの。

兄　まさかそんなに積もんないって。

弟　でも家から出られなくなっちゃったらどうするの。

兄　昼間になれば溶けるって。

弟　手紙が雪で濡れちゃうよ。お兄ちゃんがポスト見てきてくれたら寝るよ。ねえ。お願い。

兄　わかったわかった。屋根から降りて見てきてやるよ。

弟　ほんと？

兄　今日だけな。誕生日だから。

弟　えへへ。

兄　だから寝ておいで。

弟　うん。待ってるね。

兄　待ってないで、ちゃんと寝てろ。

弟　うん。（上手に去る）

兄、長靴を履く。窓を再び開ける。大きくくしゃみ。戻って上着を身につける。窓から出て屋根に降りる。

弟が窓から顔を出している。

弟　お兄ちゃん。

兄　（部屋のほうを見上げて）こら。寝てろって言っただろ。

弟　ケーキみたいだね。雪。おいしそう。

兄　ああうん。生クリームみたいだな。

弟　ポストの中、ちゃんと見てきてね。

兄　わかってるよ。

弟　ポストと封筒が同じ色だったら見えないから、ちゃんと手で触って確かめてよ。

兄　わかったから、さっさと寝ろ。

弟　はーい。（去る）

照明が兄にしぼられる。

兄、弟のいたほうをしばらく見上げている。

兄　ハッピーバースデー。（向き直り、足元の雪をすくって舐める）

甘い。

第二場

照明が元に戻る。白一色の中、赤い郵便ポストがぽつんと立っている。投函口がふたつあるタイプ。

兄　え。（慌てる）ここどこ。。

ポスト　三階です。

兄、混乱する。

ポスト　あなた、二階の人ですよね。

兄　たしかに僕の部屋は二階だけど。

ポスト　ここは三階です。

兄　いや二階から降りてきたんだから、どちらかというと一階でしょ。って言うか、郵便ポスト？

ポスト　初対面で呼び捨てですか。いささか失礼ではないですか。

兄　あ、すみません。僕はただ、うちの玄関にあるポストに行くつもりで……。

ポスト　二階の住人は許可なしに三階に立ち入ることはできません。身分証明となるものをお持ちですか。

兄、ポケットを探る。手袋と家の鍵が出てくる。ポスト、身をかがめてまじまじと見る。

ポスト　結構です。右目から整理券が発行されますのでお取りください。

ポストの（向かって左の）投函口から、整理券が出てくる。兄、反射的に受け取る。

ポスト　なんと書かれていますか。

兄　整理番号６。

ポスト　それでは向かって右側の投入口にその整理券を入れてください。

兄　右側？（きょろきょろする）

ポスト　私の左目ですよ！

兄　ええと（向かって左の投函口に入れようとする）

ポスト　逆です。そっちはさっき発行したでしょ。発行が右目、回収は左目。

兄　（整理券を投入し）それじゃあ、手紙はどこに入れるんだろう。

ポスト　テガミ？

兄　弟が手紙の返事を待ってて……

ポスト　テガミとは何ですか。

兄　何って……あなた、ポストでしょ？

ポスト　ポストですが何か。

兄　いえ……

ポスト　どうもポストに偏見をお持ちのようですね。

兄　そんなことは。

ポスト　で、先程おっしゃったテガミとは何ですか。

兄　手紙とは……ええと……伝えたいことを紙に書いて送るものです。

ポスト　紙に書く？　なぜ直接言わないんですか。そのために劇場があるというのに。

兄　劇場？

ポスト　劇場こそ、いまのあなたに必要な場所ですよ。さあ行った行った。（退場）

第三場

劇場。奥がステージ。手前に観客が椅子に腰かけ、劇場係員は隅に立っている。ステージの上に一人の男が上がってパントマイムを始める。兄登場、ステージをながめる。

スピーカーのきいんと鳴る音。

ポストの声　合格！

客席から拍手と歓声。つられて拍手する兄。演技を終えた男は礼をし、舞台を降りて空いていた客席に座る。

劇場係員が近寄ってきて兄の肩を叩く。

係員　6番。出番です。

兄　は？

係員　舞台に上がりなさい。

兄　はい？

係員　君の番ですから。

兄　僕の番、って……僕はなにもやれることなんかないですよ。

係員　ないはずはない。ここに来たからにはやることがあるでしょう。

兄　無理ですよ。

係員、嫌がる兄をステージまで引きずり上げる。兄の長靴が片方脱げ、あわてて拾う。

兄　ちょっと。靴が。

係員、無理やりに兄を正面に向かせて去る。スポットが兄を照らす。兄、もじもじする。客1と客2がくすくす笑う。

客1　変な格好。

客2　なあに、あの足。

兄、急いで長靴を履き直す。

客3　突っ立ってないで何かやれ！

兄　やれって言われても。

客3　何のために来てんだよ。

兄　僕はただポストに。

兄、逃げようとする。マイムの男が立ち上がって引き戻す。客席から煽る声やヤジ。兄、やけくそになり、無茶苦茶に踊るもしくは歌う。客たちは静まる。客4、しきりに首をかしげる。

客3　つまんねえ。

客1　（くすくす笑いながら）どう？

客2　（くすくす笑いながら）どうもこうもどうってことないわ。

スピーカーの音。

ポストの声　落第です！

客1　落第だって。

客3　落ちた落ちた。

客席ざわめく。再びスピーカーが鳴る。

ポストの声　落第の人は補習会場へ行ってください。はい次――。

係員が兄の背中を押しのける。兄、よろよろとスロープを下る。暗転。

第四場

兄、心許ない様子。兄の後ろから、同じ年頃の少女が追ってくる。肩に小さなバッグをかけている。

少女　あんたも補習？

兄　（驚く）え、うん。なんかそうらしい。

少女　あたしなんか落第と再試験の繰り返しで、何回目かわかんない。もうここに通学してるみたいなもんだよ。

兄　何回もここに？

少女　不本意ながらね。あんたは初めて？

兄　いや僕はただ手紙を……

少女　テェガミ？

兄　手紙。

少女　テガミって何？

兄　手紙、知らないの？

少女　知らない。

兄　手紙は……ほら、自分の気持ちを文字にして伝えるあれだよ。

少女　わかった和歌のこと？　短歌とか。

兄　ええと、僕が言うのはそんな古来より伝わるやつじゃなくて……

少女　ふーん？　メールみたいな？

兄　まあ……そうだね。紙に書くメール……

少女　へええ。それ、欲しいな。

兄　え？

少女　手紙。その手紙ってやつ、あたしにくれない？　いま。

兄　いま？　だって目の前にいるのに。手紙は、遠くにいる人に送るものなんだよ。

少女　じゃあちょっと離れてるから。（あとずさる）

兄　そういうことじゃなくて。知らない人に手紙を書いたりしないし。いや、そうでもないのかな……第一、書くものも持っていないんだ。

少女　あたし持ってたかも（バッグを開けて中から鉛筆を取り出す）。あった。はい。

兄、鉛筆を受け取る。

ポストの声　（遠くから聞こえる）整理番号２２番さっさと来なさい。

少女　あ、あたしの順番。行かないと。じゃあね。

少女、去っていく。残されて立ちすくむ兄。歌が聞こえてくる。

歌声　ちょきちょきこっち

落第さんは
ちょきちょきここで
ちょきちょきぱらぱら
雪づくり

白い装束の男女が四人、輪になって座りこむ。歌いながら、ハサミで短冊状の紙を三角に切り刻む。四人の中心には籠が置かれており、紙の雪が貯まっている。

兄　あのう、補習会場ってどこですか。

白衣4が、兄の腕を引っ張り座らせる。ハサミと紙を渡して、同じ作業をするよう身振りで示す。兄が紙を切り始めると、白衣2が首を振る。

白衣2　雪はさんかくに切るの。ちょっきん。

白衣たち　ちょきちょきぱらぱら
ちょきちょきぱらぱら
きょうの雪のかたちはなあに
まるにしかくにはなもよう
いいえ三階の雪はさんかく

兄、彼らの真似をして紙を切り始める。しばらくして、紙が真っ白でないことに気付く。

兄　あれ？　何か書いてある。（短冊をよく見る）『はいかが』『ようなら』……紙の再利用なのかな。

白衣1　ちゃんと籠に入れないとちょっきん。

兄　あのう、これって手紙みたいだけど？。

白衣の四人、手を止める。

白衣2　テガミ？　ちょっきん。

白衣2　聞いたことある？

白衣3　テガミ？　ないね。

兄　手紙は……文章で近況報告するものです。

四人は理解できない様子で、再び雪を作り始める。

白衣4が雪籠を持って立ち上がる。兄のそでを引っ張って立たせ、一緒にスロープへ向かう。無言で雪の降らせ方を兄に教え、兄は見様見真似で籠を振る。落ちる雪をライトが照らす。

先ほどの少女が上手から現れ、雪の下で舞う。と、突然バランスを崩して転ぶ。

少女　痛い。

少女、上手へ駆け戻る。入れ替わりに係員登場。手を上げて雪を止める。足元の雪片を拾う。

係員　三角でないのが混じってますね。くれぐれも細心の注意を払うようお願いしますよ。それでどうでしたか補習は？

白衣4、スロープの上から頷く。兄、スロープを降りてくる。落ちている雪を拾いあげると、それに記されている文字を読みあげる。

兄　「おにい」「たんじょう」「チゴのけ」これは……いくら待っても返事が届かないはずだ。手紙はこんなところで切り刻まれていたんだから。

白衣4は再び雪籠を振り始める。

兄　やめて！

兄、白衣4に駆け寄り籠を奪い、逃げる。上手そでに逃げ込もうとしたところで、

少女が立ちはだかる。

少女　何してんの。

兄　帰ろうと。

少女　雪をどうする気。

兄　これは雪じゃない。

少女　さっき降らしてたのあんたでしょ。雪に足取られたせいで転んだんだから。下手くそ！

兄　これは雪じゃない。手紙なんだよ。弟の書いた手紙なんだ。

係員　テガミ？

少女　知ったこっちゃないわよ！　あんたのせいでまた落第になった！

係員　テガミとは何のことですか？

兄　だから手紙とは……無事でいるよと知らせるものです。

少女　無事でいる？　果たしてそうかしらね。

少女が兄に襲いかかる。兄は雪籠を守って覆いかぶさり、じっと堪える。係員がやって来て殴り続ける少女を止める。少女は逃げ、係員はあとを追う。兄は体を起こして籠の雪を地面に並べ始める。ジグソーパズルのように。白衣4がそれを見ている。

あとの白衣三人が下手から現れ、うろうろと兄のまわりを囲む。手紙のパズルが出

来上がっていくのを眺める。

弟が登場し、手紙を読み上げる。

弟　「こんにちは。おげんきですか。ぼくはきょうたんじょうびでした。おかあさんがケーキをつくってくれました。ぼくはまっしろいなまくりーむのケーキがすきです。ケーキのうえはイチゴがのってます。ケーキのなかにはかんづめのモモがはいってます。おにいちゃんはぼくとおんなじくらいイチゴがすきなので、いつもイチゴのとりあいをします。でもきょうはぼくのたんじょうびなので、おにいちゃんはじゃんけんもなにもなしで、じぶんのぶんのいちごもぼくにくれました。ありがとう。おいしかったよ。でも、おにいちゃんのたんじょうびのときはイチゴをくれよって言われて、ちょっといやでした。ぼくのイチゴはぼくがたべたいです」（弟、退場）

白衣1　それが手紙？

兄　そうだよ。

白衣3　ただのおしゃべりじゃん。

兄　返事をずっと待ってるんだ。

白衣2　ただのおしゃべりに？

兄　おしゃべりだから返事がほしいんだよ。書いてやらなくちゃ。（ポケットから鉛筆

を取り出す）紙をもらえない？

白衣4、ふところから折りたたんだ紙を出し渡す。兄、紙の裏表が白いのを確認してから書こうとする。が、書けない。

兄　「て・が・み・を・あ・り……」書けない？

白衣1　そりゃあ、その紙にはすでに文字が書かれているもの。

兄　まだ一文字も書いてないよ。

白衣2　見えないだけで書かれているのよ。

白衣3　あぶり出しさ。

白衣3、籠の上でマッチを擦る。紙の雪が燃え上がる。兄、慌てて立ち上がり、白衣たちに取り押さえられる。白衣3がさっきの白紙を取り上げて火にかざす。文字が浮かび上がった紙を兄が奪い返す。

再び弟が登場、手紙を読み上げる。

弟　「きょうは雪がつもったので、ぼくが小さかったときのことを思い出しました。その日もぴかぴかの雪でした。はやおきして、おにいちゃんといっしょに外に出たら、まだだれもあるいていなくて、クリームみたいなきれいな雪でした。ぼくははじめ

て雪だるまをつくりました。おにいちゃんとふたりで雪がっせんもしました。雪でびしょびしょになってよごれたので、あとでおかあさんにしかられました。よるになってぼくがねつを出したので、おにいちゃんだけまたしかられました。でもすごくたのしかったです。また雪がつもったら、おにいちゃんとあそぶってやくそくしました。おとうさんとおかあさんはだめだって言うから、ないしょのやくそくです」

白衣3　つまんねえ。

白衣2　ほんと、つまらない。

白衣1　ただのおしゃべりじゃないの。

弟　ただのおしゃべりだよ。

白衣4　これが、君が手紙と呼ぶものか。

白衣1　手紙ってつまらないおしゃべりのこと？

兄　手紙って、

弟　覚えててねって、伝えるものなの。

兄　覚えてるよって、伝えるものだよ。

弟退場。

白衣の四人、顔を見合わせる。

そこへ少女を連れた係員が現れる。少女はもがいて逃れようとする。

係員　この子のおかげで忘れるところだった。君は補習終了です。再試験が受けられますよ。

兄　僕？

少女　あたしは！

係員　暴力沙汰を起こすと、既定に従って受験資格を失うことになります。従って今後は補習も再試験も許されません。

少女　三階に来れなくなるってこと？

係員　はい。

少女　それはいや！

兄　あのう、再試験ってまたあの舞台に。

係員　当然です。

兄　やだなあ。

係員　これはあなたの権利です。

兄　遠慮します。

少女　じゃああたしにちょうだい。その権利。

係員　は？

兄　あげます。譲ります。僕の権利を彼女に。

係員　勝手に決められては困ります。暴力をふるっておいて反省もなく……

兄　（少女に）謝って。

少女　ごめんなさい！　悪かったです、もうしません！

兄　許します。

係員　（上着のポケットから手帳を出しパラパラとめくる）うーむ……今回限りですよ。

（少女に）再試験でも合格できなかった場合は、二度と機会は与えられません。いいですね。

少女　やった！

兄　（係員に）すみません。まっさらな紙はありませんか。あぶり出しでない新しい紙は。

係員、手帳を破って渡す。

少女　あたし、次こそ合格する！

係員　手続きがありますから、劇場に戻りましょう。

少女　（兄に近寄り）手紙ちょうだいね。あたしとあんた、遠くに離れてたら書けるんでしょ？

係員と少女、立ち去る。

兄、もらった紙にさらさらと書く。が、文字は糸となって紙からすべり落ちてゆく。

兄、パニックになる。

兄　どういうこと？　これも書けないよ、書いても書いても文字がほどけて落っこち

てしまう。

白衣1　そりゃあそうよ。三階では、言葉は留まらないから。

白衣2　言葉は、流れていくものだから。

白衣3　紙の上に留まったりしないのさ。だから俺たちは、言葉を切り刻んで雪にして降らせるんだ。

兄　そんな。じゃあ僕はどうやって返事をすればいいの。

白衣たち、顔を見合わせる。

白衣4　ことばを降らしたらいい。

兄　どうやって？

白衣3　ことばをのせた雪をつくるのさ。

白衣たち　ちょきちょきこっち

ちょきちょきぱらぱら

雪づくり

ことばがさんかくなのは

なんのため

だれかに向かうように

突き刺さるように

刺さっても抜けるように

ころがらないように
目印になるように

白衣4　さあ。（と兄にハサミを渡す。空っぽの籠を兄の足元に置く）
白衣1　どんな手紙にするの？
兄　ぼくはここにいると。（紙にハサミを入れる）
白衣2　何て伝えるの？
兄　きみのことを覚えているよと。（ハサミを入れる）
白衣1　それだけ？
兄　ぼくはここできみのことを考えています。（ハサミを入れる）
白衣2　それが一番伝えたいこと？
兄　それが一番だいじなこと。これをどうすればいいの？
白衣3　そりゃあ、雪を撒くんだ。ついて来い。

白衣たち、列になってスロープを上がる。兄、籠を持ちあげて白衣のあとに続く。
舞台、薄暗くなる。全体に雪が降り始める。
少女が踊りながら現れる。

白衣2　あ、雪。
白衣1　これが、ほんものの雪なの？

白衣2　お砂糖みたい。

白衣1　甘いかしら？

白衣3　さあここから降らせろよ。

兄　本物の雪と混じってしまうよ。

白衣4　ことばをのせた雪は、届けたい相手に向かっていく。そのために雪は三角なんだ。

白衣に促されて兄は紙の雪をつかんで撒く。下手、弟が登場。

白衣3　ほら。おまえの雪だけが違うほうへ向かってゆく。

白衣1　そして刺さるのよ。

母親の声　まだ起きてるの？

兄　届け。

母親の声　こんな時間に窓なんか開けてどうしたの。

弟　雪見てたの。

母親の声　また熱が出るわよ。寝てなさい。

弟　わかってる。

兄　刺さったと思う？

白衣2　刺さったわ。

母親の声　おやすみ。

弟　おやすみなさい。

少女が踊り終え、袖にはける。遠くに拍手の音。

ドアが閉まり、去る足音。兄と弟にスポット。

弟　ただちょっと、おにいちゃんを思い出したんだ。声が聞こえたような気がして。

兄　ハッピーバースデー。

弟　ハッピーバースデー、って。

弟、退場。

照明が戻ると、兄が一人きり。隣にポストが立っている。整理券のポストと似ているが、動きも話しもしない。兄、ポストを見つめる。暗転。

（幕）